

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	水明インターネット句会（選句・選評） 令和八年四月
	名負人	絵夢 幹子	風舎 名負人	光雲2 和永	くるみ			展平 朝子 わがん	霜里		朝子 榎舟 かれん はっち	光雲2	くるみ 田猫 絵夢		
花見酒監視カメラが覗いてる	晩春の 大木を 伐る清 め塩	過ぎ去りし日は みな眩し 飛花落 落花	迷想を空に預けし 鳥曇	山峡に紅の床しき 山桜	飛花落花ばんざい ポーズの腕の中	図書館の席は窓際 卯月尽	ストックを玻璃の 花瓶へひとかかえ	辛夷咲く峠三里の 下りかな	角打ちのテール ブル囲み荷風の忌	桃の花ちひさき子 の手のやうに揺れ	枝先をすべる雫や 春の雨	受験の朝母が握りし 塩むすび	永き日や水琴窟の つぎの音	遠きより四重奏なる 花見かな	
河野凡士	くるみ	光雲2	立野音思	新 曆文	春代	ひろ志	しーしー	北郷興亜	新井のり子	つぶ金	森 佳月	宇田靖之	展平	米山カロ リング	

遠きより四重奏なる花見かな

お見事な一句。定年後か、春休みか。豊かな。

永き日や水琴窟のつぎの音

受験の朝母が握りし塩むすび

春の訪れを告げる雨の、静かで潤いのある情景が丁寧に切り取られている。枝先をすべる雫という表現が良かった。映像が浮かびます。

枝先をすべる雫や春の雨

桃の花ちひさき子の手のやうに揺れ

ご近所さん下駄履きで集まり。

角打ちのテールブル囲み荷風の忌

辛夷が鮮やかに見えてきます。山を下ると少しづつ辛夷の城が鮮やかに見えてくる計。リズムよし。

辛夷咲く峠三里の下りかな

ストックを玻璃の花瓶へひとかかえ

図書館の席は窓際卯月尽

景が目に浮かぶ。

飛花落花ばんざいポーズの腕の中

ゆかしさが良いです。

山峡に紅の床しき山桜

色々な思い出が浮かんでくるものの、後ろ髪を引かれるような鳥曇だという作者の複雑な思いがしのばれる。

迷想を空に預けし鳥曇

過ぎ去りし日はみな眩し飛花落落花

晩春の大木を伐る清め塩

花見酒監視カメラが覗いてる

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16
			春代	はっち	凡士 曆文 梗舟	つぶ金 春駒 くるみ 風舎		曆文 梗舟		のり子 俊之	光雲2 ひろし 瞳人		のり子	
藤棚に蝶ただ一羽迷ひ来て	風に舞う桜足もと先導す	真間川や暮れかかりゆく花筏	桜咲くひ孫誕生声高く 「声高し」に春の息。	朝起きてもう呑むまいと蜆汁 飲兵衛さんには納得の句？	伊予は春岩で背中搔く露天風呂 伊予はゆのくに春爛漫うらやましい。岩で背を搔くの表現が上手い。道後温泉が懐かしい。	ほほゑみは言葉のひとつつチューリップ ほほゑみと季語の違和感が微妙に好き。季語が生きている。「ほほゑみは言葉のひとつ」、本当に微笑みは、言葉要らずで、万国共通ですね。	ビル街のコカ・コーラの赤風光る	能登の海背に初夏の千枚田 千枚田の景色が目に浮かぶ。	新入生服もリュックも身に余り	はるかぜが好き暑からず寒からず まったく同感。シンプルさに、心惹かれます。	春風や青春切符の一人旅 なつかしき青春の思い出。	去り行くは昭和の記憶春の宵	風船を孕ます息の酒臭く 花見の無礼講の数々が浮かぶ。	魂匣あけたら最後風薫る
総太郎	薫風	しんい	和田イチ子	長谷川 おにこ	ありぎりす	朝子	神谷たくみ	春駒	高松和永	秋谷信一	高田はっち	瞳人	白井俊之	山菜

45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	水明インターネット句会（選句・選評） 令和八年四月
	しーしー		暦文 風子 春代 かれん 楽 風舎 絵夢	朝子	山菜 しーしー 楽 鶴城	凡士			たくみ 俊之 楽 鶴城 風子	山菜	風子		展乎	和永	
図書館の席は窓際卯月尽	お別れの夜に賜りし春の雨	パンジーのごとき黄色や紋黄蝶	春の昼睡魔が文字を食べ尽くす 文字食べ尽くすの表現が見事。措辞が面白い。文字が見えなくなるほど睡魔が食べ尽くすといつた表現が良かった。わかります。一睡魔が文字を食べ尽くすの表現が素晴らしい。意識の境界がぼやける瞬間の描写が、詩的。春は眠くなる。猫はネズミを捕ることを忘れる。	故郷は寺多き街藤の花	四月尽第二志望の程の良さ 五月からはどうでしょうか。	西暦も四半世紀ぞ春疾風 早いもので9・11から20余年、今も世界は混とんと。	葉桜や路上ライブを遠巻きに	せんべろのまづはお通し春キャベツ	叶うなら春の二度寝の如き死を まったく共感した。同じ思いです。年取ると誰しもそう考える。	三鞭酒を試飲三杯春シヨール 三鞭酒は知らなかった。臭そう！	閉ざされしままの黒門鳥帰る 三ノ輪の圓通寺の黒門と解釈、季語の持つ寂しさの本意がよく効いている。	月の裏初見粟立つ春心	春耕や畝濡らす雨美しく 句の情景にすつと入れます。	アトリエに流るるソナタ風光る モーツアルトでしょうか。	
ひろ志	峰岡名負人	雪待月田猫	青木鶴城	佐藤幹子	わがん	石関六弦	かれん	平野 楽	霜里	染谷風子	小林土璃	絵夢	龍野ひろし	岡崎梗舟	

60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	水明インターネット句会（選句・選評） 令和八年四月
つぶ金 田猫	しんい	幹子	たくみ 展乎 はっち 幹子 鶴城	わがん				和永 瞳人 霜里	瞳人 六弦				たくみ		
立ちさうな茶柱二本うらけし <small>立ちさうなと季語の微妙さが好き</small>	香水のシャネル五番は飾るもの	風光る錆びた錨にあくび猫	小三治の落ちの余韻や春の宵 <small>粹な春の宵ですね。リズムのいい句。</small>	ひき蛙無頼の貌の貫目かな <small>貫禄ありますよね。共感します。</small>	歩数のメ吟行のモや山笑ふ	ルルルル散居に田打つトラクター	花筏ふたりの想いを乗せてゆく	百歳の母の見てゐる散る桜 <small>いつまでもお元気で。</small>	日本酒の似合う女の花見かな <small>花はしづかに、愛づ、べかりけれ、とも言うべき風情につて。</small>	篝火に背を向けている桜かな	大欠伸春の日溜り目覚め猫	春昼の千の手こぞり差し出さる	動揺は春の月よりやつて来る <small>やつて来る、がいいですね。</small>	水草の名教え給へアウシユビッツ	
くるみ	春代	立野音思	新 曆文	北郷興亜	ひろ志	しーしー	森 佳月	新井のり子	つぶ金	米山カロ ーリング	宇田靖之	展乎	石川順一	青山 雀	

75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	水明インターネット句会（選句・選評） 令和八年四月
				春駒 六弦		しーしー		春駒 霜里		かれん	しんい			しんい 山菜	
月明かり照らす桜も見事なり	真間川や花筏はや暮れの色	うぐひすや研ぎ澄まされし村の朝	ツーショット邪魔せぬように花かがり	草餅やえくぼのような叔母の皺	マンションの風に子の名の鯉幟	花びらと一緒に貰ふテツシユかな <small>花びらが舞う中でのひとコマをうまく切り取ってますね。</small>	チューリップ咲いて仲直りの下校	元気です友の絵手紙葱坊主	沈丁や今朝の想ひをとこしへに	主を売りしユダの末路や花荊 <small>花荊の荊から発想されたのでしょうか。ユダと結び付けたのがユニーク。</small>	変哲のハモニカ聞こゆ昭和の日 <small>多才な小沢昭一さん、懐かしき昭和、ハモニカも又復活？</small>	新品の教科書絵の具風車	うくひすや経読み習ふ知恩院	落書きかアートとみるか暮れかぬる <small>落書きに決まっています♪</small>	
薫風	しんい	朝子	長谷川 おにこ	ありぎりす	高松和永	神谷たくみ	春駒	高田はつち	秋谷信一	山菜	瞳人	白井俊之	光雲 2	河野凡士	

90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76
			つづ金のり子	名負人	ひろし 春代	ひろし				俊之田猫 わがん		凡士		
諸葛菜散歩帰りの父の手に	夏近し雌しべはウォーターライダー	春の昼下手なへの字が空を行く	船頭の追ひかけてゆく春ひとつ <small>「ゆく」は「ある」もあるかなと。「追いかけてゆく」が効いている。</small>	図書館の二階の逢瀬花水木	すれ違う欠伸と欠伸目借り時 <small>写生が効いている。</small>	夏近し浜辺に光るシーグラス	昼間からひとり角打ち春の風	ホルムズより備へ影刺す南風	風船や流るる雲と明日の身は	春夕焼防災無線のアヴェ・マリア <small>夕焼け、防災無線、アヴェマリアの調和がすばらしい。夕焼けの美しい村に、何故かアベマリアが似合う。</small>	旅帰り爺の畑に葱坊主	若桜咲く咲きたくて咲きたくて <small>現代俳句的な詩。</small>	白壁を彩るアート桜散る	沈丁花ほのかに匂う朝厨
佐藤幹子	雪待月田猫	青木鶴城	石関六弦	わがん	霜里	かれん	平野 楽	絵夢	染谷風子	小林土璃	総太郎	龍野ひろし	岡崎梗舟	和田イチ子

105	104	103	102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91
											花筏みぎにひだりにまんなかに	道を行く燕は雨に挫けない	さくら散る咲けずに枯れた肩に散る	腰痛はゼロにはならず菜の花忌
											青山雀	石川順一	峰岡名負人	ひろ志